女學雜誌

第二百十八號目次

社說　政治社界の君子大丈夫○多數女學校日下の欠點(上)

論說　淨瑠璃節及び其著作(星川逸民)○賣奴の弊風再燃せんとするを防ぐべし(大江卓)○島田三郎氏の演說

批評　女學雜誌の短所○黨弊私言○小牧陣始末批評の評○海江田翁大臣十二規箴○日蓮上人龍の口の事○家山の曲を歌ひ江湖新聞を去る

雜錄　青井榮懷を訪ふ(淸水紫琴子)○倹寛○貧家一盆の美食○懸賞答文○富める者に眞の盗賊あり○今の產婆今后の產婆養成○家の手わざ○跡見花蹊女史を訪ふ(牛野ふみ)

小說　うき世　(其五)

寄書　思ひ得たるとども○ほとゝぎす

開書　偶感(泡月女史)○交詢

時事　經濟家の慈善論○凶年且つ損年○美人獨坐○こがひ○信なきに在りと○夏の日の詩人○各宗派管長會議○產みの苦み○樂しひ哉○農科大學○女學生艶聞發生の時季○救濟記事○醜娼記事

女報　東京感化院○皇女御種痘○スピンチル氏○女子の牧師○スコットの小說

"It seems necessary for a woman to be a mother in order to be venerable"—Victor Hugo

島田三郎君救濟慈善說

跡見花蹊女史を訪の記

女學生二號發兌

目下多數女學校の欠點

日蓮上人辰の口法難辨

六月廿一日發兌　第二百十八號　一冊定價六錢

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 218. 21st. June. 1890.

EDITORIAL:— A Word in regard to [illegible] Girls' Schools of the Present Day. What Constitutes a Gentleman [illegible] Field of Work.
LEADING ARTICLES. Japanese [illegible] Literature [illegible] The Modern System of Society [illegible] Mr. [illegible]'s Lecture.
CRITICAL NOTES. The [illegible] of Jogaku Zasshi. [illegible] Party. The [illegible] "K[illegible]" [illegible] for the [illegible] [illegible] the Late of [illegible] Mr. M[illegible]'s [illegible] the "K[illegible]".
MISCELLANEOUS. An Interview with Miss [illegible] One [illegible] of [illegible] the [illegible] Family. The [illegible] There are [illegible] The Present and the Future Students of the [illegible] the H[illegible] An Interview with Miss [illegible]

NOVEL: [illegible]
OPEN LETTERS.
CONTRIBUTED ARTICLES.
NOTES AND NEWS
CONCERNING WOMEN.

第二百十七號目次

社說 [illegible]の方法
論說 [illegible]
批評 女子[illegible]
雜錄 [illegible]
小說 うき[illegible]
文苑 [illegible]
問答 [illegible]
時事 [illegible]
女報 [illegible]女學校

WOMEN IN JAPAN.

I. T[illegible] K[illegible] K[illegible]

1. [illegible] Speech. 2. [illegible] K[illegible] Music. 3. A[illegible] 4. A[illegible] Song [illegible] 5. An Appeal [illegible] the Philanthropy [illegible] Mr. T[illegible] 6. A [illegible] Dance. 7. A St[illegible] 8. [illegible] Music. 9. M[illegible] Address. 10. Japanese K[illegible] 11. [illegible] a M[illegible] 12. S[illegible] and Prayer.

We [illegible] to the Ladies [illegible] who have [illegible] to bring about [illegible] entertainment. For 1400 [illegible] "K[illegible] K[illegible]" [illegible] that [illegible] left standing. Mr. T[illegible]'s earnest appeal to the Audience [illegible] 50 sen [illegible] to the [illegible]

II. The [illegible] of the "K[illegible] K[illegible]" [illegible] another [illegible] for the [illegible] to [illegible] within the month.

III. W[illegible] from [illegible] from S[illegible] Pref. that [illegible] of a public [illegible] both these [illegible] has become.

IV. Miss T[illegible] M[illegible] to the K[illegible] [illegible] to America at [illegible] July to [illegible] 3 [illegible] course at "Mr. H[illegible] S[illegible]".

V. Mrs. W[illegible] appeared in the last No. of [illegible]

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌　第二百十八號　明治二十三年六月二十一日發兌

社説

政治社界の君子、大丈夫

政黨以外に超然たらんと、云ふものはあれども、撰擧競爭の外に超然たらん、と云ふものは極めて稀あり。今に於て吾人が此事を勸告するは、寧しろ迂僻の誹を蒙むるのみにして毫も其詮あらざるべき歟。然りと云へども吾人が平素に於て信ずる所ろの主義を以て之を考ふる時は、世の同胞が今の如くに狂奔するは無極の拙愚なりと見ゆる也、而して其の自づから買しとしとする所ろは非常の馬鹿らしき所なるを、承知するあり、故に一應は思ふ所ろを陳せざるを得ず、一應の陳辯聽れずと云へ共、尙ほ再應論述する所ろあかる可らず。四方の通信に據る時は、撰擧候補者の多數は既に發狂したるヨりに見ゆるなり、左あくては迚も聞くが如き不埒なる事を行ひ得まじくと信ぜらるゝ也。或る者は金を散じて民心を買ひ、或者は慈善を賣りて人望を買ひ、或者は小冊子に附物を添えて己れを撰擧するの方法を打合せ、或者は反對者に無き汚名をきせて自からを高くせんとし、或者は投票買受の直段を取極め、或者は自撰投票の用意を爲し、或者はステッキを振ひ、或者は小作人を嚇し、或者は負財者を威ろかし、凡そ強迫壓制の手段として試みざる者なし、又或れは僞信徒となりて佛法を信じ神道に入り、或者は基督教を棄て、俄かに權門に媚を呈し、下の者に腰を低くゝし、海老の如く上下に曲りて此の三週間は乞食をするの覺悟を爲せり、而して三週間后には議員となりて一國の大政を料理せんと云ふ也、さてゝゝ大日本帝國の不幸も極まると云ふべき哉。

如此き人物に向つて、議員となるとの甚はだ大切なる所以を說法すとも分るとあけん、故に只だ議員となるとの損多くして得少きとを吹聽すべし、蓋し損多くして得少なしと聽く時は、彼等は早々に考へ直す所ろあるべきがゆえ也。思ふに彼の人々は、議員となるとを以て名譽多きとぞ思へるならん、勿論大したる不名譽の事にはあるまじきが、去りとて之に依りて新たに名譽を增すともあるまじ、察するに彼等は日本の議會を以て英國米國の議事院の如くに思ふならん、成程其の益のなき所ろは彼にもあるべく亦我にもあるべしと云へども、其の益ある所ろにして彼に在るが如きとは必らず

しも我には在るまじき也。今日議員未定の内には様々の想像もするなれ、一日確定して上下兩院に定數の議員を出したるの曉には、彼の議長各杯と云ひ、分らずやの戸長さんと云ひ、借金多の郡長と云ひ、不通信の裁判官と云ひ、隣の代言人と云ひ、ごく／＼の新聞屋と云ひ、大概名の聞えて餘り面白からずに覺え居りたる人物が集まりたるに過ぎず、馬子に衣裳を着するも依然として馬子なり、彼等議員に異なる所ろは議員と云へる名を冠むりたる丈けにて其外に別に價ある無し、彼に議員と云ふ二字を冠むりたりと云ふことを引去る時は、彼等が人物に假の上りたるにもあらず、此等の人物は十中在程撰まれたるとなし、然るに其人物等が集まりたりとて別に議會の價格の飛躍すべき理由もあらざる也。故に今に於て想像する時は議員となるとを以て大層の名譽を得ると思へけれど、既に議員となり了りたるの日には別に一段の加ふる所もなきとを悟べし。實際彼の府縣會議員に於て言々たり、議員となりて名譽あるの人は議員とならざるも名譽あるの人なり、議員とならずして既に名譽あるの人は議員となりて居ち新たに議員たるの名譽を加ふべし、然らずして無理に議會に入り込み、討論の際いつも贊成とか同意とか述べ、肝腎の時に居眠りを爲し、忽然目を覺して只だ手を擧る丈けの事にては、議員と爲りしとが其人に取りて名譽を加へざる耳ならず、反つて彼は其の不器量を世間に廣告するに似たり。彼もし隱れて居たらんには其の評判もあらざるべきを、僅ま格外の地位に登りたるが故に其不適任の事を自から吹聽するとなれり、金を使ひ時を費やし辛ふじて議員になりて其の力量なきとを廣告するに至つては不然、此上なしと云ふべし、喩へば辛苦困苦して高き台に登り、ラッパを吹立て「己は如此く馬鹿なり」と言ふに均し、これ豈に彼が爲めに名譽ならん哉。

議員となると既に名譽を加へず、金の點に於ても益する所決して無し、月俸十圓の月給は多きやうなれども、之が爲に様々の交際を増し殊に開會中東京にある間だに無益の入費を消費すべし、經濟上得あるにもあらざる也。議員となるに既に名譽を増さず、金を加はふることなし、世間幾多の候補者は撰そも何を求めんとして騒亂するぞ。

然れども第一回の議員には成るべく好き人物を出したし、之に付きて盡力するは勿論の事なり、されど好き人物は自から廣告せずとも評判は常に彼に尾して附隨し來る也、亦撰擧人も銘々正當の投票を爲さずんばある可らず、被撰擧者は靜默

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

して天の命を待ち、撰擧者は沈思熟考して其尤も尊崇する人物を擧ぐべし、斯くして初めて眞の議員を得べく、眞の議員にして初めて議員たるの益を受くべし。

ジヨン、ハリフハックスは最初宿無しに非ずや、然れども自尊揚々、斷言して云く、

個々の撰擧人が眞實の投票を爲し、自己の力量が正當に見認められて撰擧せらるゝ迄、決して國會議員とはならじ。

之れ豈に堂々たる政海の大丈夫に非ずや、程伊川云く、君子の時を需や安靜にして自ら守る、志し須とありと云へども恬然として將に身を終んとするが如し、進まずして志動くものは其常を安んずること能らざる也、と願はくは政海に君子あれ、大丈夫あれ、君子大丈夫にして初めて一國の政を議すべし。吾人が如此く勸告するは戰國に仁義を說くに似たらん、然れども仁義に非ずば遂に戰國を一統長撫すること能わざるにあらずや、吾人が如此き勸告は炎熱の地に水を播くに均とし、爲めに涼氣を生ずること幾干もあらしと云へども、然れども尙常に水を播かざる可らず、何んとなれば幾日同志者續々起り立ちて之を與にするに於ては、全地を涼しくすること亦難からざるが故也。

多數女學校目下の欠點（上）

六月も早や殘り少なとなりぬ、七月八月は大率ね各女學校の夏の休みにして、九月に至れば更に新らしき學年の初まるを見んとす、故に今後の一學年に行はるべき學科の豫定は、大凡そ今日以後近々の間だに於て定まらんとす、左れば今に於て目下の女子敎育法に對し卑見を述るは、頗ぶる時宜に適するの事と信ず。見よ、政界には人々狂ひたるが如く奔走す、宛がら今日ありて明日あることを知らざるものに似たり、然れども敎育者は常に十年の後を思ふものなり、たゞ浮世の轉變につれて動搖すべきにもあらず、今に際して此般の事を再三深思するは、極めて愉快なり。

目下の女子敎育法に關し、吾人が其の如何にあらんことを求むるやは、既に前號に於て略述したり。亦た今の女子敎育法の通弊なるものに付きても、既に再三陳辯する所ろありたり、蓋し、敎授に英語多して、國文の少きと、暗誦の科多くして、研究熟慮の時少なきと、概するに授業の時間格外に多くして余暇の至つて少なきと等に關しては、吾人屢ば之を言へり、世人も亦た屢ば之を言へり、而して各女學校も亦た多少其弊を改

めんとせり。故に此等の項目に付きては今改めて研究するの必要もあるまじ。

他に與論の未だ氣付かざる所ろ、もしくは其の大に誤解し居る所ろのもの少なしとせず、吾人請ふ其二三を掲げん

先づ體操の事に付きて言はんに、體操は女性を荒々しくすと思ふ者あり。此に於てか大日本教育會にては其體操の存否を提出し、他に何か好き方法のあるまじきかを、質問したる者すらあるなり。

其觀念は何如にも誤謬なれども、體操練習に非ず、若し其意の優美は必ず活潑に伴ふ者なることを解せんには、其妄ひ忽ちにして消え失すべし。抑そも日本の女子は多年室内に閉ぢ込られたる者なり、其住宅の内に非ずんば、部屋の隅なり、於此乎、箱入娘ども云ひ閨秀ども云ひて、只管らに其閨居することを徳としたり、故に女の出歩るきを宜しからぬことに言ひ做し、随つて其の能く歩くことを見苦なきものと為しぬ、之を以て實際は飛脚屋の子の如く歩るき得るものも、歩るけぬと言ふことを以て女の容姿の如くに心得、二三丁歩行し脚氣損りにして與へがたく遂に車に乗りたりなど言ふときは、何んとあく女ならしく嫋らしき所ありと思ふなり。歩るくことすら如此し、働らくことに至りては一層然り、凡そ働らくことはお三排助の仕事にして文弱なる婦女子の為し能ふまじきことと定まり、總べて女は萬事に重々しく立居くるし氣にては勞瘵肺病の氣味あるを以て宜しきとは為しける。則はち女らしきとは動かざるの謂ひにして、事々に人に他頼り一切自づから切磋するの力なきを稱すると云ふ、古來の優美なるものは即はち不活潑の別號なりけり、左れば女學生が一二三の號令によりて歩兵操練にも似たる體操を行ふときに於ては、女性の優美最早悉く滅絶し、淑芳忽ち化して粗暴と為れるほどに感ずるなり。氣の毒なる心配と云はざるを得ず。抑その優美とは因循の事に非ず、眞の優美は必ず活潑なるものなり、死して動かざるの謂にあらず、活きて宜しきを得るの態なり、而して體操は五體を巧みに運動せしむるのみならず、亦美くしく運動せしむる者なり、故に體操に熟するときは身體自づから整齊安和し、八面瑩平として當りがたきの趣あると共に上下左右均調にして一點の間然なきに至るべし、即ち風采の眞とに美なる者にして優あると之に過る者あるなし、女性の優美豈に他あらんや。然るに、女學生が號令を聽き合圖を掛けて體操する樣の何如にも活潑なるを見、あゝ女性もし常に如此くんば大騷動なりと思ひ、其の運動の樣を見て直に平生

も亦然あらんと信ずると、是れ杞憂の發する所ろたり。左れど人は遊ぶとき走るが故に常にいつも走るものにあらず、働らくとき動くが故に常にいつも動くものにあらず、此も一時にして彼も一時たるなり。故に躰操の時に動き過るが故に平生に於ても動き過ると思ふは大ひなる誤まりなり、彼の男書生を見よ、彼が相撲を取り、駈くらを催うし、喧嘩を爲すときに於ては隨分危うき程に騷ぐにあらずや、然れども其の禮場に臨むときには粛然として士君子に似たり、是れ騷ぐときは騷ぐ時なるが故に騷ぐあり、然れども彼の時に騷ぐが故に禮場に於ても亦騷ぐと云ふとを得ざるにあらずや。夫れ亂暴なる男書生にして尙然り、況して平生謹しみに深き女學生に於てをや、彼をして躰操の時に騷がしめたるが故に、式場に於ても、人の前に於ても、常に騷ぐべしと思ふは無用の心配なり。スペンサー曰く、男兒よく遊べども長じて紳士と爲るべし、女兒幼にして遊びたるが故に長じて佳人となるとを得ざるの理なしと、即はち此れを言ふ也。況んや、躰操は單に遊び戲むるゝの比ひには非ず、規律整然、躰度嚴粛、號令と共に周旋動止すると恰かも禮に據りて身躰を訓練するが如し、豈に啻だ之に熟するとが優美を欠かざるのみならんや、實は之により初めて眞正の優美を養成し、進退動靜初めて宜しきを得んとする也。吾人躰操せずして只だ溫和しきが故に優美なるの女子を見るに、其樣操つり人形の如し、節に合わざるに非ずと云へども態度死せるに似たり。躰操して活潑々爽に優美を凝むるの女子は、其樣生る女俳優が振舞ふの心地す、生氣活鮮にして初めて人間らしき思ひのする也。吾人は三歩すでに息氣切れするもの肺勞娘を可とせず、裾短かく身輕ろく淡裝快歩して全世界を一週せんとするの氣込ある西洋娘を宜しと爲す、躰操の効果豈に女性をして荒々しく爲すものならんや、實に之をして生かしめ且つ美ならしむるもの也。

故に躰操の科の各女學校に必らず設けられんとを所望す、現に多年之を實行したる二三の女學校の經驗を聞くに、効果頗ぶる好し、皆な吾人の前論を證するもの丶如し、故に未だ此科を設けざる各女學校は是非とも速かに之を新設し、彼の腦を使ひ過し、運動に不足し、勉學一二年乍ち花の如き顔を藍の如くに青くするの懊悩なからしむるとを念願すべし、女學生の頭らには學問を押し凝み、其身躰をば縛りて動かしめず、試驗によりて血液を激流せしめ、憂鬱不快によりて其心を痛く々しくせしめ、而して我校の女生如此く溫和しと云ふは、衰弱

の植者漸やく死に近づく時、見よ北人如此く沈着なりと云ふ
よ、然し、天下何処にか、斯の不信切の教育者なからんや」

論說

浄瑠璃作者及び其著作　下河川き氏

浄瑠璃作に通行せる詩想に理想の少きなる、気質の薄弱なる
これ亦、ゴールドスミスは云ひしき、世運の傾向は民情の反映に在り（同氏詩集）と、然れども余は此語を以て反対の果にあらずして原因の果なりと思ふ、浄瑠璃作が逆の時代は封建の上部に位する者すら徳義に欠けたるが多く、武家は和歌俳諧の翫弄などを以て月卿雲客のやから神寐を侮ふし公然乱臣を取り謀りせしことを或る書に見へたり、或は至治の後を承け貴族のなかぞち不撓の行ひして恬として顧みざりしと云ふ、加之京坂十里の浴客軽薄に流れて深く其快楽の極に染みける故に、其不賍状として猥褻卑賤なりしに怪むに足らむ、況んや作者幼稚にして世界を瞭眼し真理を看破するの明なく、ひたすら俗に媚びて其歓心を得んと勉めたるをや、ローマンチックの奇想麗々に散見するもそが為めのみ。

原林子は蓬門より出て衆生化度の謂からんを望みて作者に為りきと云ふ、さるに男女の相愛を叙し、君臣の大義を序で、荒唐奇奇の想を恣にするに至つては實にやすからぬ謬ちありいて男女叙情の際一二を擧げん、

夫にはなれて世の中に何か望のあるべきぞすでに自害と見けるな、コトバはて思ひあい合點、夫にはなれしさは何こさで、此首こそは他人なれ首より下はかふじん／＼、詮付未望達しなば、コト・詳細つて顔はかりはあちらむき、肌はふしみいふたりはそやさ、たわむけすかいな女房も、謀つしたにつこさ笑ひ、いゝいゝ（お弓大内）

（四段目かに）まれに打向ひ、やすき門の夢ながら枕におくれて一七日立つやたいすめ其内、御心配らなりがたし、由陸みてぬ其内は、死せ給ひさ有りけるには、姫君らやくさ詞にすがり、コト・何は作の物うらやさ、夫は閑ぬ御仰せ、其体上に何さし、君が様ある美い調子な生せ給ひけるで、思ひへにてはあらさるや、いゝいゝ、エゝ文句なさ目惑あゝ、女房達に御方より技／＼またあやへん／＼さ、それは惜い繰の段、今此すいな世の中に何かはいらぬ苔／＼さ、れいぜい十五夜しがたにて、もごつしがたに御君はやう／＼に心つき、下着たふはさ打きせてじつさ／めたる下さしもは彼方も共方も賤けにけりゝゝゝ「十二段」

江春むく／＼、詰めかかり、彼だきにひつたりさ、サアうつくしい女郎さらへたさ乳いあたりへ手たやれは、アゝこそはれ、またしてはく／＼だきついたり手なしめたり、一度がでやうおきん夫につけてどこもかしこも紫色につめらせます、・いうあさいやさふりになら、どつこいやらぬ、木まりんきさうごんにこしやうさにお澁よりなんさら存せぬ、紫色におみが水中がかばちや色に成さても、君ゆへならにいさはぬ、むごいぞえ／＼、待晩／＼ねごみへお見舞申せさん、一夜も木留さけさせぬ、我ゆへ此只數名を替へて鎌足の大臣、玉なさる思案はなり、今夜こそいやさいはせぬ、一つの〇〇ぬき持ちて、夜海底に飛入るぞおふか／＼さ泣きしもるゝゝゝゝゝ「四八孫柱暦」

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

かゝる骨子が何時の世にか實際に存在しうる、よし實在したるにもせよ、爰に記せるが如き場合に於て極汚極褻の獸念を起しうる者なるや、渠妖艶鄙俚の理想を捏ね合して世の極猥者を表顯したりとも見へざるに筆勢の到る所即ち此の如し、衆生化度の徳いづれに在りとかする、然れども余は衆生化度を以て作家を責めず、唯に作家着想の至愼至重ならざるを見ては渠等がために竊かに惜まざるを得ざるのみ。

今日淨瑠璃の新作を綴るは最とかたかり、理想の高潔、結搆の雄麗、文藻の絢爛、この三の作家に必要なるは勿論なれども其外にい、い、い、比較の索如なる者ありて大抵の作家は苦しめらる、い、い、い、比較の索如とは理想と實態と比較の衝突に因りて趣味の減少破滅するを云ふ、この弊時代ものには割合に尠けれども世話物には甚た多かり、巢林子がはるかの後に(元祿十六年五月)「曾根崎心中」を作りたるもそを免れんとてあり、希世の才筆を以てすら習練に習練を積み筆力加倍するを俟ちてこの弊を免かるゝを得にき、如電先生の「憲法由來」は余未た一見の榮を得ざれども去歳の憲法發布に着想して世界を王朝時代に采られしは蓋しこれがためならん乎、中島笥氏の「逆卷浪」は十年の役を叙せしにて曾て一讀したることあれとも委しくは覺へす、纔きに末松靑萍氏樂師某等に飾つけさせ語りそめし由其頃の新紙に出でぬ、比較の弊如何にや聞まほし。

雜誌都の花に秋城居士?の名を以て揭けたる新作はこの弊拔も尠しとせず、例之政治主義の異なるが爲に娘を離緣する親の造作もあさ、生別を苦んで其端に自殺する妻の他愛あさ、忠臣じみたる首領、上使めきたる調和員は今日實際に有るべしとも思へす、政黨の實態と昔時反目鬩墻んでとに詐謀を逞ふせる世の想態とを比較するが故に德義、國法、世態の別交〳〵錯襍に紛淆錯綜して感合の瞬時を餘さず、一部の茶番狂言の脚色としも見ゆめれ中々に淨瑠璃節の名さへ下だし難し、何時の頃なりけん余銀坐の寄席に過りつ一樂師の「醉月奇聞」とて曩日都門に隱れなき妖婦花井某の事蹟を語るを聞く、其技無下に拙なりしにあらねど比較の弊甚しく余の心眼を衝しかば聞くに汗して他人に顏見らるゝ樣なりき、試みに思へ裁判所と云へ判事檢事と云へ刑法第何條と云ふが如き之を聽く余の心眼は果して何ものをか寫すべき、逆殺、姦婬、強盜詐欺等の付つて世に在る罪惡の事相を穿鑿して心裡に世を恐なみこそすれいかで樂の妙致を感取するを得んや、又た新眞人角田眞平大岡育造と云は之を聞く余は二氏の性質德度を追

求し、果ては政治上社交上の名譽瑕瑾失敗までも吟味して樂の興味益々遠からざるを得ず、蓋し裁判所は國家の大法を執行して公安を保證するの門、理是れ需めて寸毫の情ある筈なし他の景事の如くこれを精寫せんこと樂の好手段と云ふへからす、既に適當の樂材を擇はす、况んや之を描いて阿古屋の重忠景季に於ける朝顔の駒澤岩永に於けるか如き嫌あるおや、比較の索如是に至つて極まる。然れども其道に依れば世話物敢て作りかたきにあらず、曰く想を蒐めて活躰となす而已、知らすや世界の庶物諸情を描くの道は局部調和の全き者に在るを、是美術の眞意にして樂の本願なり。

賣奴の弊風再燃せんとするを防ぐべし（續）

大井卓

前申し述べたる通り今晩の演戲會は藝娼演戲と云ふ事で娼妓の事に限つて噺しなければならんのに、前に申した通り娼妓の證文を手に入れる事が出來なかつたのは誠に遺憾で有ります、遺憾では有りますが寫し丈けは手に入つたから其證文は金の借りと自分の身を樓主に任して居ると云ふ二ツで御座りますそふして娼妓にも其種類が三ツ有る、即ち全で抱えられて最も一身の自由を賣つたと同樣の者之を全抱えと云ふ。扨て私が昨年の夏廣嶋に參つて歸りに小蒸氣船に乗り瀬戸の内海を戻る時に、女が三十人許り何だか怪しいのが帶も結ばずに乗つて居り、又其の處に洋服を着た人が一人居りまして、其洋服を着て居た人の側から右の女に向つて彼是と差圖を致して居る下男らしい人が一人居りまして其人の服裝を見ると雨も降らないのに雨合羽を着て恰で演劇でする關戸と云ふ風な人で有りました、その男が女達に向て其方へ往つては成らんとか此方に居るが善いとか云つて種々差圖をして居ました。ソレから其連中も私と共に神戸に上陸したので有りますが其上陸る前にアの棧橋を渡る時の有樣杯は實に何うも申し樣も有りませんでした、船に醉つて姿躰はやつれ嶋田髷はこわれ浴衣の上に帶も結ばず歩行く樣は實に見られたものではありませんその時に私は或人にアレは一躰何者で有るかと云つて聞いた所が、アレは廣島縣下の名產にして大抵東京に往く所の女郎であると斯う申しました、其時に私は吃驚して實に澤山の女郎では無いか恰も奥州から博勞が馬を牽ひて來る樣で有る。（大喝采）成る程司法省の布達に牛馬に齊しきとは此處で有ると考へました。（ヒヤ〳〵大喝采）即ち是等が全抱えに成つて自分の權利と云ふ事は毫しも無く、帶から足袋から天窓の物迄皆な貸座敷で拵へて遣るので有ります。ソレから又飯代と云ふのが有る、是は只飯の代丈け拂ふと云ふ譯で上方邊りに澤山行はれて居りますと云ふです例へば一圓の玉代を以て一ト晩お客を勤めれば廿五錢貸座敷に遣り自余の七十五錢は自分が取りて衣服等の諸費は皆自分持でありますす又折中と云ふて中分は樓主に遣り他の中分は自分が取る是れには或は接客衣物は主人で拵へ寢衣と夜具は自分で拵へるとか云ふ樣な種々な定めが有るさうです。

藝者にも其通り自前と云ふが有るそれは前にも申したる如く自分で門戸を張り何の何某と云ふ提灯を點けて、獨立して營業して居るので御座います。又其家にも抱えの藝妓が一人か二人は居るが其抱えにも矢張り全抱えだの折中だのと云ふ種類が有るそうです。扨て娼妓は素より淫を賣るのが商賣で有りますから兎も角も藝妓の中に假令へば折中で有るとか全抱へで有るとか云ふ人には、抱え主は何う云ふ仕向けをするで有らうかと云ふ事は考へねばならんと思ふて或る新聞の探訪に賴んで之を聞て見ると、此の全抱えと云ふ者の中にも細別すれば種々の種類が有るそうです、先づ殘酷な家では衣物もお客に出る丈けの衣物を着せて遣るが、其他は傘も下駄も買つて遣らない、且つ買つた玉代は自分の身の代の爲めに取られ、加之に御祝儀迄抱主に取られるので有るから是非とも何かその外に働いて簪とか天窓の物で有るとか、或は傘とか下駄とか其他の小遣ひ迄も自分が仕なければならない、是れは取りも直さず内々淫を賣れよと指揮をするのと同じ事で、（喝采）此の使い方も實に殘酷な使い方で有る、併し其種類や何かの事は兎も角も凡て藝妓で有れ娼妓で有れ他人の娘を抱えて置いて自分は左り團扇で暮らそうと云ふのは、何うしても人の權利を奪つて居ると云ふは免れない事實で有ります既に

天賦の自由を害する事で有りとしたならば、自由主義を取る所のもの各々權利を平等に與へんければ成らんと云ふ趣意に背いて居るから、政事上に於て是非とも之を改正せんければならんと云ふは政治家たる者の最も勤めなければならん事と思ひます。（大喝采）

乃で全抱は如何なる殘酷な事に成つて居るかと云ふに、（證書を示し）此證文は少し年立ちたるものなれ共藝妓の證文の本書で實印も捺して有るのですから充分證據となりましよう是れに依て見ますと全く人身賣買に關して居る、只今朗讀致して諸君の御注意に供へます。（謹聽々々）

借用證之事

一金五拾圓也　　利子の儀者規則の通り

右の金子正に借用申候處實證也返濟の儀者明治十三年一月三十一日限り元利共返濟仕候若し其日限至り滯候節者戲鶴屋に預け置候しめ子の身の上は貴殿の御存意通り如何樣に御取り計らい成され候とも御勝手次第に可被成候依て自分共に於て後日に至り一言申分無之候爲後日借用證文如件

神田三崎町二番地

何　誰　某　印

明治十二年十一月

同　某　印

右證文の姓名丈けは憚りて讀みません是は全く私の娘を御勝手に御處分下さいと云ふ證文にて丁度物品を賣買するのと少しも變らない、所謂人を物貨にして賣買したのと同じ事で有る。（ヒヤ／＼）即ち私の申す賣奴の弊風が再燃致したので有る、依て諸君と吾々は義務としても充分に之が防ぎをしおければならん事だらうと思ひます。（滿場大喝采）又其外折半の證文も皆な此の通り（證文を示す）有りますが餘り長く成つて却て猥褻に渉ますから、只諸君に御目に掛けて置き私の論據は皆な證文に實印を捺して有ると云ふ事丈けを明かして置きます。（證文の捺印の部を示す）（朗讀を請ふ）併し今も申す通り餘り長く成つて却て猥褻に渉る樣では往けませんから、……（中分にても宜しい）

乃で此證文を以て買入られて居つて加之に其鑑札と云ふ者を預かられて居るからよしや其處の家が殘酷で有るから他家に往つて商賣を致し度いと思つても、返上する鑑札が無ければそれも出來ません併しながら吾々が考へて見ると實は智惠の無いので有る、若しも返上をいたしたと云ふ場合が有れば警察署へ駈込み訴へをして、妾の鑑札を抱主が隱して仕舞つて渡して呉れません。何うぞアノ鑑札を渡して呉れる樣に御説諭を願ひますと云へば、直ぐに警察署の方で取扱つて返して下ださるに相違ない、然るをソレ丈けの智惠の無いのは或は其邊に氣の附かんのか、又は馬鹿正直なのか隨分殘酷な目に逢ふて居る者が有るのですが、詰り是等の人々は無智者と見へまして吾々は智者の地位に立ちソー云ふ人を救ふの考へを持たなければなりません。（ヒヤ／＼）

全體此の廢娼と云ふ事に就ては又其反對なる存娼論者が有りますが、凡そ社會に有りとあらゆる物に少しも惡るい事は無いと云ふ物も無く又、少しも善い事は無いと云ふ物も無い、手近に申せば純粹純善と云ふ者は無い害で有る。ソレ故に此の娼妓と云ふ者を存して置くにも亦存して置く丈けの利益が有りませう。又廢するにも廢する丈けの利益も有りませう。又廢するの害と云ふ者も隨分か有りませう、凡て何事も利害相伴つて居る者で有る、其相伴つて有る中で害ろ害の多い利の多い物を吾々は取らなければ成りません。（大賛成）乃で先づ存娼論者の言ふ所に據れば（）私は演説場に往つたのでは無い新聞紙上で見たので有る、最も衛生上に就て説かれた樣だが成程此の衛生上の事に就て考へると、維新前には書生や、浮浪の有志者中に隨分梅毒を受けた者を多く見受けましたが、近來學校に這入つて居る生徒或は遊學をして居る處の人達を見まするに、此の梅毒を受けた處の者が少なくなりました、是れは詐社會の道德が進んだからで有りませう、學問が進歩したからでありませう然れ共其道德の事に付て御一新を中心として其以前と以後とを比較して見たならば、御一新以後は其以前よりも道德が大邊に進歩したとは言はれまいと思ひます。して見れば此の梅毒の減じたのは獨り道德の進歩したる爲めのみにもあらず又治療の進歩した爲めに梅毒が鮮く成つたとのみと云ふ事も出來ませんかと思います、何か其他にも重なる原因が無ければ成らん害です、それは何で有るかと云へば即ち檢梅法と云ふ者が無論社會の梅毒を鮮くした大功の者と云はなければなりません。（ヒヤ／＼）ソコで此の檢梅法は何れの時から始まつたかと云ふに、是れは全く外國の賜物で有ると思ひます。ソは何故かとなれば日本で檢梅法の創りは何處で有るか、即ち横濱で有る、横濱開港の初めに當ては外國から來る人々が妾を連れて來る者が鮮ない、それ故に表立ちたる立派な條約では無いが、外國公使と神奈川奉行と示し合の上で何うしても水夫抔の心を慰る爲めには妓樓が無ければ成らんと云ふので、始めて此處に女郎屋を立てたが恰も其の女郎屋の出來た當時は日本に梅毒が多い頃で、外國人も此れでは迚も耐らんから外國の醫者を召んで横濱に梅毒檢查を成たいと云ふ事の談判が整ふて、遂に横濱に梅毒病院を立て英國海軍軍醫が出張して梅毒檢查を始じめたのです。其中に松山氏の如き或は淺田の如きが或は大坂に行ひ東京に行ふ樣に成つて早や今日では到る處梅毒檢查が無い場所は無い位に出來たが、併し其始めは矢張り外國人に教えて貰つて明治六七年の頃迄は外國の醫者が出て女郎の梅毒を檢查したので有るから、其功は中々一と通りの事では有りません。併しそれならばと云つて吉原を存して置き品川も存して置かれば梅毒檢查は出來んかと云ふに、遊廓が無いからとて梅毒檢查は寄も差支の無い事は外國抔の噂しに隨分承はつて居ります。今迄諸先生達が此の廢娼の事に就ての演説が有りまして、或は人道の事なり、或は英吉利の事で有るとか云ふ事は充分御噂しが有つたと云ふ事は承つて居ります、併し私も演説の順序で止を得ず諸君の御耳に蛸のいつて居る御噂しを（ノウ／＼）致さなければ成りません（未完）。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

島田三郎氏の演説

みれ子

過る十四日一番町基督教青年の發起にて「貧民救助青年慈善會」を木挽町厚生館に開きし、左の一篇は其節島田三郎氏が演説せられしものゝ大意なり。

今日青年會員諸君の發起にて此慈善會を開かる、依て余にも一場の演説を托せらる、余近頃多事にて寸閑を得ず、故に充分の用意を為す能はざりき、されど諸君の委托に背かんも本意ならねば簡短の演説を為すことゝせり。

今日天下の輿論は曰く慈善事業は社會を害するも益ある事なしと、今社會の有様につき、一例を舉げて論ずる所あるべし、佛國革命は取て以て鑑となすべし、自分其革命に加はりし歴史家テイン氏革命史を叙するに當り其原因を人民の貧困欠乏に歸しぬ、凡そ萬般の出來事には遠因と近因とあり、水の堤防を壊り、横溢汎濫する所以のものは必らず一時の降雨あるが為めに非ず、長く降り續き、久しく溜り、漸く滿水するの後一雨あるが為めに横溢す、凡そ社會の出來事も亦斯の如し、三年の間氣候順を得ず、農作豐ならず、加ふるに外國との交戰繁く、租税愈重りぬ、飢渇旦夕に逼るの人民國内に滿ちぬ、是即ち佛國革命の遠因となす、ルイ十六世即位す暗弱にして國を治むるの力なく人心漸く亂れ、遂に彼の大革命を惹起しぬ、日本現今の有様よく佛國革命前に似たり、昨年以來天災地妖頻りに至り、豐作實らず、穀價騰り、從て諸般の物價貴とし、昨冬降雪少くして、今春來雨ふる事多く、麥作は平年に比して收穫少し、是より氣候直り秋時米穀の收穫常の如くんば貧民の困苦も救ひ得べし、されど若不幸にして米作豐ならずんば貧民の慘狀如何なるべきぞ。

此に尚一の不幸と云ふべきものあり、我國の富源なる蠶地に霜降り、桑葉枯死せるの一事なり、古來我國に穀物實らざりし時は、蠶糸を輸出し、其入金を以て印度地方より南京米を買ひ入れ、以て穀物の欠乏を補ひけり、然るに養蠶地方に斯かる天災あり生糸の産出も亦例の如くならずんば天下の窮民愈々窮し、苦人益々苦しまん、窮苦の餘り、或は恐る佛國革命前の如く人心洶亂するなきやを。

凡そ社會の亂るゝ所以は啻に人民困窮するが為めのみに非ず貧富の懸隔甚しく、上下の意相通ぜざるにあり、昔晋の恵帝の時年凶にして人民饑えぬ、帝之を聞きて曰く盍ぞ肉糜を食はざると、是れ帝が下情に暗かりしがゆゑにして、笑を千歳に殘す所以なり、斯くのごとく上下相通ぜざれば、上下の懸隔愈烈しく、貧者遂に富人を怨嗟するに至る、是實に國家の紊亂する原因なり、之を防ぐ只夫れ慈善の事業にあり。而し

10

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

て慈善の事業は、最も中等社會の人民に適す、上等社會の人々は其位置の高きに過ぐるが故に容易に下等貧民と接し、其狀態を明らむる能はず、但中等人民に至つては仰では顯門高閣に出入し、伏ては下等社會と交はるを得、故に上下の意を通ぜしめ、社會の平和を保つに最も適當す、今府下の人口百万あり、其内甚しき貧民は一万に出でざるべし、而して最も多くは中等社會ならん、豈一万の貧民を救濟し得ざるの理やあるべき、是啻に貧民の飢餓を免れしむることそ直接の益あるのみあらず、間接に人心の動搖を防ぐの功あり、故に曰く我國の治安を維持せん爲にも慈善の事業は必要ありと。

凡そ社會の有樣は水中に石を投ずるが如し、一個の石水を動かし波を起す、波は溶々行て止まず、水の全面に波動を傳ふ、斯の如くして一國亂るれば他國亦騷ぐに至る、紀元千八百四十八年佛國騷亂の餘波旋て英國に及び、國內將に亂れんとするの徵候現はれぬ、プリンス、アルベルト大に之を憂へ、其親友シャフテスベリーに其救濟法を質しぬ、シャフテスベー侯はアルベルトに告げて自ら職人の間に下り、其實情を探る事最も策の可なるものなりと云ひぬ、時の宰相ラッセル卿之を聞き、今貧民上を怨む、若此に至らば、暴民の凶謀を企るやも計る可からず、非命に失せんは益なし、思ひ止むべしと諫めたりき、アルベルト公は遂にラッセル卿の言に從はず、親しく職人社會に立入り、其救濟の法を講じ、上下の意相通じ、亂を免るゝを得たりき、慈善の働は直接に功を奏するのみあらず、間接に國家の紊亂を防ぎ、治安を保續するの力ありと云ふべし、思ふに深窓の裏に住む上等社會の人々は下民の困窮をよく知らざるべし、此時に當り上下相通じ、擾亂を未だ起らざるに防ぐ者は只夫れ中等社會の人々にあるかな。

貧民救濟の方法種々あり、政府にて救ふも可なり、會社にて助くるも可なり、一個人にて施すも可なり、されど凡そ事に緩急あり、其救ふべき順序を誤らば思はぬ害を來すべし、故に第一に救ふべき所を捨て置き、第二第三を助くべからず。

外國に於ては都會の貧富は政府官廳の有無に關はらず、例せば桑港の如し、其繁榮する所以はカリホルニヤの政府あるが爲めに非ず、地勢自ら殷富を致すなり、我國に於ては然らず、東京の盛富なるは全く諸官省と政府とあるが故なり、之あるが故に國內の富皆東京に流注し、而して府下に散ず、されば東京府下の窮民は其の窮狀未だ地方の貧人に比すべからず、人或は云ふ、奧羽北越地方の如きは米穀を產する地なる

が故に、暫く饑饉不斷、穀物不作なるも、貯蓄する所を以て欠を補ふを得べしと、されど實際は然らず、専ら米穀を産する地方は他に產物少なし、一家の費用は米穀を賣りて得たるものを以て充つ、故に年々の收穫は自家に給用するだけを貯へ、餘は賣出す、されば一朝不熟歲の來るあらば其困窮すると他地方の貧民と異るなし、故に地方の困窮は東京府下に勝りて甚し、今年米價の騰れり、米穀貴らずんば日本全國貧民の困窮云ふ可からざるものあらん、此際に於て上下を通ぜしむるあらば誠に然るべき數々を擧くに至るべし。されど限ある資用を以て限りなきの貧民を悉く救濟するは難し、其地方の人民は東京府下に於て慈善の擧をなすものあるを聞き、富者を怨望するの心を生ぜず、故に窮乏の内にありても自ら默む所あり、是社會の紊亂を防ぐ所以なり、人或は云はく貧民を救助するは徒に懶惰に陥らしむるに過ぎずと、されど病氣の為めに貧窮し、餓死せんとする者を救ふとて決して懶惰ならしむるの理なし、否慈善者のあるに感じ、愛國の心を起すに至らん、されば慈善の事業は愛國心の發達をも助くるに至る、是亦慈善家の與ふる間接の功なり。

批評

女學雜誌の短所

閨秀新誌の第四號に云く、

女學雜誌は幾多の長所を有せり、曰く、高潔、曰く熱心、曰く自信、曰く忠實、此等の諸美德は實に女學子の特有なり、吾人深く之を畏愛す、且つ又女學子は幾星霜の經驗を積み、女教に對しては他より悟得する所多きが故に、吾人は時々之に師事せんと欲することなきにあらず、然れども彼も亦た多少の短所なきにあらず、吾人は衷情より數言の忠告を呈せんと欲す。

女學子は熱心の餘り世の弊害を除き氣に入らぬものを退けんと欲して、却て屢もよく意外の敵を作り、意外の反動を起す、心情を察すれば賞すべしと雖も、其方法の拙なるは大に惜むべし、彼は自信に深き餘り、說く所往々偏頗に失し、人をして自惚に深き者あり、唯我主義あり、排他主義ありと、感ぜしむるに至る、故に折角の忠實の言も、他を諭し他を導くの媒介とはならずして、却て他に憤怒の氣を與へ、嘲笑の念を起さしむ、之れ豈彼の精神ならんや、彼に對して

斯く思ふは啻に吾人のみならず、亦た他の三四の論者も同感ありと承はる、女學子幸に吾人の忠言を採れ、新參にして且つ經驗に乏しき閨秀子恐懼叩頭して白す。

謹しみて忠告を謝す、閨秀子の友人も屢ば左樣に勸告せられたり、成るべく過まちを改ためて善に遷らんとを期す。

黨弊私言

（日本十四日紙上）

保守黨の運動の目覺しからぬは、谷隈山君の動かざるに因る、而して隈山君の動かざる理由に至つては、其の「黨弊私言」の如く能く得て之を辨ずるものなし、誰か云ふ君を迂なりと、君の迂ある所ろ即はち是れ大ひに國事に憂ふるの所ろあり、今や政海は怒濤狂瀾を捲く、此時に當りて靜かに蠶を養なひ、糸を調査するの余裕あらんものは、大ひに黨弊を憂ひとするものにあらずんば能はざる也。吾人は蓋し君の所謂る同感者の一人なるべし、願はくは共に協力し、黨派軋轢の外に超然として立たん。

小牧陣始末批評の評

曾我中將は家康を奸雄として立論し、三浦中將は其志を美なりとして觀察す、二者見る所ろ各々理あり、然れども各々理あるときは三浦中將の說に加擔せざるを得ず。

海江田翁大臣十二規箴

翁の私義考案に揭ぐる由、大臣に十二規箴ありと。第一、大臣は國家の安危を忘る可らず。第二、大臣は夙夜國事の爲め辛勞を辭す可らず。第三、大臣は民心の發達を洞察すべし。第四、大臣は信用を堅ふすべし。第五、大臣は一躰なるべし。第六、大臣は弘く內參謀を用ふべし。第七、大臣は民心を察し時機に應ずべし。第八、大臣は一身の護衛を廢すべし。第九、大臣は言路を開くべし。第十、大臣は弘く異說を搜聞すべし。第十一、大臣は苦を先にして樂を後にすべし。第十二、大臣は多數人の意志を參酌するとを主とすべし」と、是れ堯舜の遺訓にして且つ西洋立憲政の價値を得たるものとす、若し此の規箴に適するの人物あらば、吾人も其人を大臣に推薦せざるにはあらず。

日蓮上人龍の口の事

既に刀が折れしとか否や固より知れがたし、たとひ折れしと

するも若變へあく折れざりしとするも亦若變へあるなし、但だ之に歷史上の研究を加へ、從來無數[illegible]の間に生存したる幾件を問題にするは、頗ぶる益あるものとす、其特數の學者には近時五十年間の[illegible]に俟ちていよ〳〵其[illegible]を明白にし[illegible]たり、[illegible]の[illegible]より其實際に用ひんとするに決して人道の[illegible]にはあらざる也

宋山の曲を讀んで江湖新聞を送る

[illegible]江湖新聞を送れり、其の[illegible]使[illegible]、[illegible]ふて文藝の[illegible]に[illegible]るを[illegible]ず、[illegible]し其の如き人物は凡俗の新聞[illegible]に[illegible]はざる所あるし、況んや[illegible]めより[illegible]にする所あるの新聞紙に於てをや。ロンドンの[illegible]らざるに[illegible]ず、然れどもパメンスには[illegible]の[illegible]たるの[illegible][illegible]たるものなし。

[illegible]

雜録

女子演說家と評判する晴井榮嬢を訪ふ（下）

清水豊子

今日は日下何名ありや

と問ひたるに總數日[illegible]僅を以て四五名に過ぎずとの事なり夫より予は更に嬢が所謂女權は如何なるものを以て其標準とせらるゝにやと問ひたるに嬢曰く主に[illegible]數に依る權りなり然れども[illegible]數なるものは今日の時世にありては間々迂遠と思はるゝ所もあるを以て今様の權は東西に於る道德學を調和し之れを今日に[illegible]するものとして先づ之れを己れの身に行ひ而して後人を化せんとす、いはゞ、

身を以て女權の標準とせんのみ

素より此の如き事は容易く為し難き事にはあれ共自分は斯く[illegible]信れり[illegible]夫より予は又女權の事に就て問を發し嬢は女權といふ事に就ては何も意見なきや或は今日の儘にて宜しとせらるゝか將た又今少しく女權を擴張せねばならぬと思はるゝ乎但し又男子と同等の權利を得るまでに為し度と希望せらるにやと尋ねたるに嬢は女權といふ事に就ては何等の感じもな

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

きもの丶如く至て覺束なき調子にて、

男女同權といふ事は素より天理に叶はぬ事なれば女子は何處までも男子の下に居らねばならぬなり但今日の狀態にては余り低く過ると思ふのみと答へたり是に於て予は重ねて到底幾許位宛相違すれば其權衡を得たるものにやといはんとせしかども夫程迄に問ふの必要もなしとて扨止みぬ夫より時事に就きて二三の談話をなせしが別に記すべきほどの事もなし要するに孃は我國姉妹の爲にとて兎に角奮起したるものなるには相違なきが如し然れ共其演說會の開き方等に於て其宜しきを得ざりしが爲め種々の世評を招き心あるものをして眉を顰めしめたる事なきに非ず故に予も未だ親しく女史に接せざる間は如何なる思想を懷く人なる乎と思ひ惑へ居たりしが先づ其女德を重んずるてふことを聞きて大に安堵したり依て今後孃に望む所を述べ暇を告げて立歸りぬ。

以上記し終りたる後三四日を經て左の書面に接したり、這は右青井榮女史の主唱に係る女子青年倶樂部の賛成者たる菊池敏雄といへる人より寄せられたるものにして即同青年倶樂部事務所內は同然せらる男子中の一人なり

(前畧)然るに此回御尋れ下され候節青井榮女史青年倶樂部の趣意を放擲して自己一身の意見を吐露せし由承知いたし誠に青年倶樂部の爲、殘念の至に存候女子青年倶樂部の趣旨とする所は斯くの如き儒教主義のものに無之宗教に關せずして運動せんと欲し候ものに御坐候而してその望む所は女德の涵養女道の研鑽に在りて要するに女海の元來の惡習を除去し女性の淑德を養成し女性の權利義務を擴張せんと欲し候ものに御坐候左れば廢娼禁酒は勿論の事に御坐候に青井女史は廢娼に關して淡然たる說を吐き候由に聞及びぬ尙は亦女權の擴張に關しても最も不熱心の語ありし由なれども當青年倶樂部は決して左樣のものに無御坐候以上陳述致候趣意にて運動せんと欲し候ものに御坐候(中略)先は青年倶樂部の爲に斯く申上候云々。

右は素より菊池氏一己の資格にて寄せられたるものとはあれど此書に依るも女子青年倶樂部なるもの丶成立を想像するに足るべしと思ひ敢て附記しぬ讀者幸に諒せられんとぞ。

俊寛

ゆかり

西八條の專橫を、いかでか余所に見らるべき、漢の末世霍氏の強傲、王氏が亂も外戚の、威力に重を借ばなり、虫の音すみて露淸く、細谷川の音さびて、星光竹風凉平たる、都の東鹿が谷、しのび〳〵につとひ來て、事成りぬ可き曉に、佞姦邪智の行綱が、盟に背きしそがために、恨の征矢の一條も、敵に放たで縲絏の、耻を蒙り萬頃の、波濤をこえて今此に、古しを忍ぶ一孤客、悲憤の念の絕ゆ可きぞ。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

眾帆紅閨の夢あれて、憐れや今は騒妃の、枕に通ふ濤の音、清松庵の昔さえて、むかし聞にし玉琴の、調によくも似たるかな、破れし屏縫の板間もる、月影凄み千鳥鳴く、夜半をばいかに過す可き、嵐の山の櫻狩、法勝院の秋の月、蓮臺の席管絃の、まとひに侍る時なりしも、訪ふ人もなき孤島の主、限りもあらぬ悲しみに、淚の乾る間もなかりけり。

貧家一盆の乞食

みどり

良人はインフルエンザの猛り逆し病者となりて臥しきりなり、縫目の此頃は日々の食物を購ぺぬほどなれば、醫藥抔などいふものは見るよすがも出來ず、妻は家のへ作ら賃仕事をすれども脳家にしてさきまよ針の運みも實々しからず、當年の幼な兒ははの乳の乏しきによりて長く病患しくなくし隣家に慈悲深き老母ありけり、出さきにて鷄を買ひ入りとて持より彼女もかた饑ゑへ作ら此の憐れむべき家に來みたり。殊に依然として病める人の枕辺、妻の膝の前にあり、兒に譲れども十分の具を食ふべき者とは知らぬなり、妻は良人にすゝめて云ふらん、ちど聞くは為り申しつれど、此召し上り玉へ、久しく食しめされねば、さぞかし御疲れのつよくましますべし。

良人頭をふらして答ふらく、

いなく\、お前こそ止みなく働らきて疲れつらん、余は常に伏して居れば物欲しくもなし。

妻の重ねて言ふを斥ぞけて、

いな、お前の為のみにあらず、斯く久しく食せずては乳も出まじ、初孫（幼兒の名？）が不憫ならずや。

嗚呼妻は餓ゆる良人の目の前にて之を食しぬ、其味大甞の品に勝るべけれど、勝るほど、苦るし。

懸賞答文

理想佳人

下照なの答　香町閑主人

その昔某女房が隆思を論ずる中に理想の佳人を擬べよとありけるにまかせて既に妻ある身にしあれどさすがにまだ妻のかくてあれかしと思ふ節のなきにもあらねばたゞ好小の為めのみならず後の人が妻えらびする段にもやならん其他の介識たちが心得ともなりぬらんとていとをこなる業なれどわが思ふ所をしるしぬされどたらざるふしあるはもとよりなればとるとらざるとは讀者の胸にこそ」

第一信情 廿點(百點ノ内) 信にして情あつきが第一に好ましなべて男は、物粗く心にすまぬ事どもある時にも女が信切なる言葉にて打ち解くる事あり

第二温柔 廿點(百點ノ内) 何に事にも物和に行へば落度少く人よくあづくべければ家内の取締りもよく行き届きなん

第三敎育 廿點(百點ノ内) 敎育はいと入用にはあれどされぱとていたく高尙なる學科を修むるにも及ばずたゞ一わたり讀かきもしたちぬひも出來て子供の敎しへ方をしれぱそれにて充分なり

第四敏才 廿點(百點ノ内) 物に敏く才賢しければ人と交るにも如才なく能く夫をたすけ落度なければ家よく治まりて快樂此の上なかるべし

第五美容 十點(百點ノ内) 以上の事ども備へたらんには望すでにたりぬれどもまた隴を得て蜀を望むとの諺あれば此の上の望みには人なみにあらまほしあまりみめよきを願はずされどさりとてあはれ醜きも口惜し。

理想紳士

館林 N・K・女

下點左の答

先づ何學にもせよ學士の稱號を得たるかさなくとも社會にたちて恥かしからぬ位の學力ありて品行方正なるは申までもなくおよそ社會公衆のためとしあれば身を犧牲にして率先奔走し敢て名利をむさぼらず又貴顯の門にへつらふ事なく業務の何たるを問はず固く自身の主義をとりよく其責任をつくし威嚴高くして妄りに人の企だて能はさるの見識を有するを五十點とす。

凡人と交際する純潔篤實にしてことばをかざらず禮義正しくして人を見るの才あるを三拾點とす。

常に慈善の志あつく又よく孝悌の道を盡すを二拾點とす。

富めるものに眞の盜賊あり

兼好法師

盜人を懲しめ僻事をのみ罪せんよりは、世の人の飢ゑず寒からぬやうに、世をばおこなはまほしきなり、人恒の産なき時は恒の心なし、人窮まりて盜みす、世治まらずして凍餒の苦しみあらば、科のもの絶ゆ可らず、人を苦しめ法を犯さしめて、それを罪なはん事不便のわざなり、扨て何如して人を惠

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

むべきとならば、上のおごり費やす所ろをやめ、民を撫て農を勸めば、下に利あらんと疑ひある可らず、衣食よのつねなる上に、ひがとせん人をば、眞の盜人とはいふべき。

今の産婆、今后の産婆養成

醫科大學教授濱田玄達氏の建議により、此度び帝國大學に産婆養成所を設けられぬ、之に付き濱田氏の建議ありし理由を承はるに、今の産婆の弊害は實に恐るべきものあるなり、同氏の建議文中に云へらく、

職を大學に奉ずる日尚淺く其經歷も亦少なしと雖も屢々産床に臨み細かに産婆の情況を觀察するの機會を得而して其教育は甚だ不完全にして反て大害あるを知れり即ち世に舊産婆と稱する者は姑らく措き彼の定規の試驗を經て醫業に從事せる所謂産婆なる者にも亦眞に産床の取扱法を知り且つ之を實行する者殆んど之れなく漫に高尚の學理を唱へ猥りに不當の手術を企て爲めに胎兒を殺し産婦を危きに陥らしむる者蓋し尠からずして而して其未だ斯の如く甚だしきに至らざる者と雖も亦た適當の處置を施さゞるが故之れが爲めに他日難治の病を釀生する者往々皆是れなり是れ職として産婆養成法の其宜きを得ざるに由る者とす

不肖熟々世の産婆養成法を實驗するに其方針を誤る者一にして足らず或は産婆に必要なる産事の實地取扱法を授けずして却て之に無要なる過當高尚の學理を課する者あり或は産科醫と産婆との差別を混淆し産婆に教ゆるに産科學を以てする者あり故に其所謂卒業するに至る迄二年乃至三年の長時日を費し而して其結果は醫事も知らず産事も知らざる一種無要の異物否な死物を養成し了するに過ぎず而して死物をして彼の轉變不思議の産床に臨ましむ過誤なからんと欲するも亦豈得可けんや

夫れ常産は天なり病にあらざるなり故に醫治を要せず泰西近世の統計に據るに醫の手術を要す可き者は百人中僅に五人に過ぎずして餘の九十五人は自然に經過し了する者なりと云ふ而して其自然に經過する常産と雖も其處置一朝宜しきを得ずして或は爲すべきを爲さず又爲す可らざるを爲さんか忽ち母兒に害を及す者なり然れども常産に臨みて其爲す可き處置を爲さゞる者は其害尚は未だ大ならずと雖も若し之に爲す可らざるを爲すときは常産をして忽ち變産に陥らしめ小にしては他日の病原を醸し中にしては

母兒の一を殺し大にしては其二を殺すに至る

豈寒心せざる可けんや

夫れ變産は病なり天に非らざるなり故に必ず醫治を要す然れども其常と變とを鑑別するは醫と眞産婆とにあらざれば能はず而して其變産に臨みて醫治を施すに又一定の時機あり決して早きに失す可らず又晩きに失せんか母兒共に危し故に眞醫は必ず其機の至るを待つ其機已に至らんか實に瞬時も躊躇す可らざるなり而して此機を察すると

眞醫と雖も時に或は難しとす

況んや産婆に於てをや是故に産婆の業は常産に臨みて應分の處置をなし能く産婦の擧動に注目し之をして其危害を招くが如き事物を避けしめ僅かに異常を認むるときは其何たるを問はず速に醫を迎へ其指揮を受くべき者にして決して變産に與かるべき者にあらざるなり

然るに我邦産婆の多數は則ち然らず或は常産に臨み自然の經過を待たずして猥りに爲す可らざるを爲し故らに母兒をして危からしめ或は變産に臨み速に醫を迎ふるが如き宜く爲すべき事を爲さず徒然手を束ねて之を自然に任し

胎兒既に死し産婦亦危きに迫り

始めて狼狽醫に告ぐる者あり是れ畢竟産婆に教ゆるに産科の事を以てするが故に手僅かに其事を知りて而して術は之を施すの時機を察するの明なく以て前者の過ちを來すなり又之に教ゆるに專ら理論を以てするが故に口僅かに其理を說くことを知て而して尚常變を辨ずるの識なし是れ後者の不足ある以所なり是故に産婆養成の法は則ち

實際を專らにして理論を避け

産科的手術等の如きは努めて之を教へざるを以て彼の得たる者とす歐洲に於ては嘗て此主意を以て養成するが故に其修業の期限の如きも亦甚だ短く多くは四五ヶ月にして其業を卒へ長きも亦一年に滿たずして決して我邦に於けるが如き長時日を要する者にあらざるなり嗚呼我邦の産婆は今や將に其弊に陥らんとす今にして而して之を救ふの策を講ぜざれば他日禍害の益々甚だしきを如何せん而して今の時に方り其路に當る者は則ち我大學を措きて他に望む處なし故に速に産婆養成所を醫科大學産科教室中に設けられんとを希望に堪えざるなり

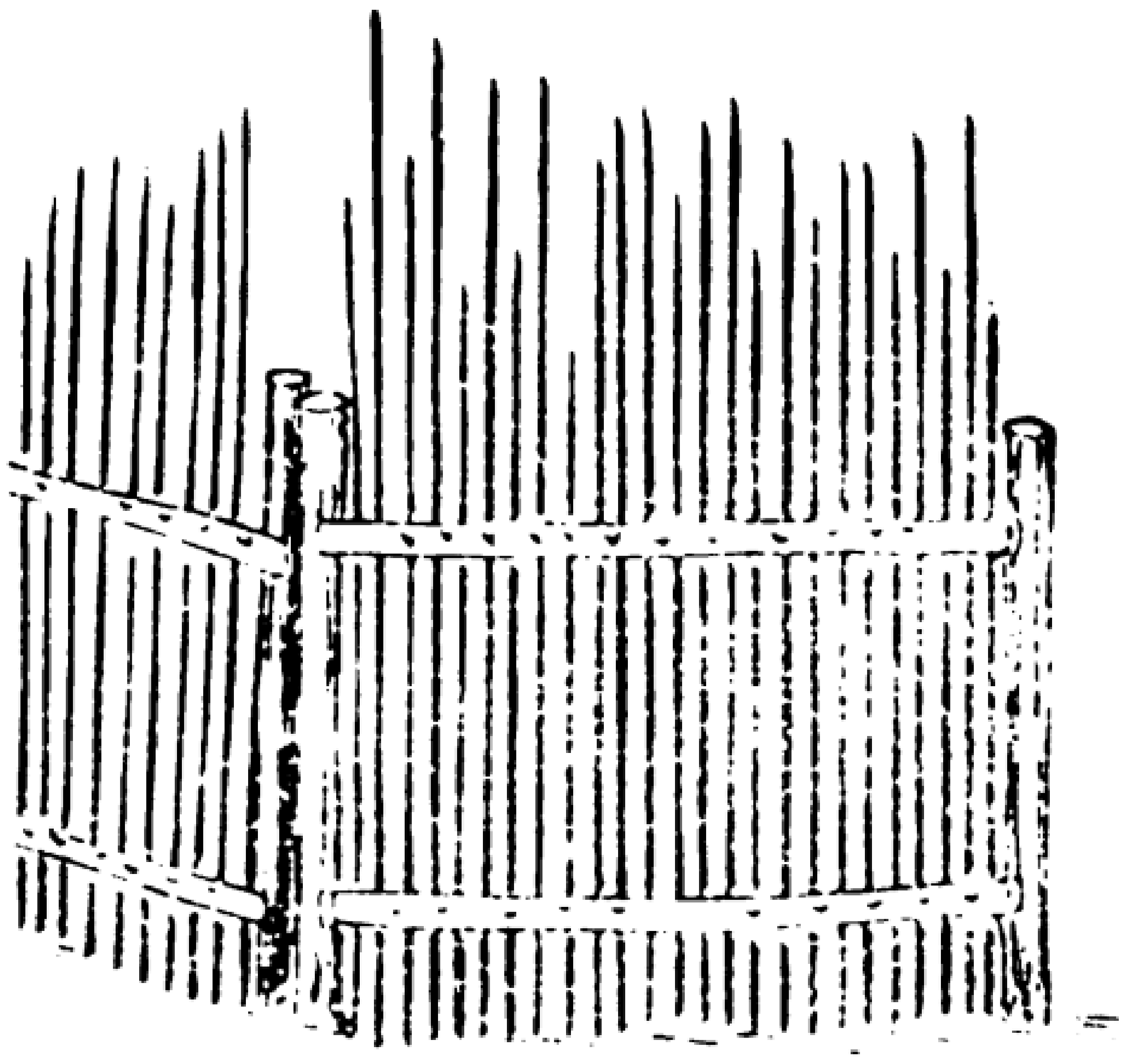
家の手わざ

養鷄心得の追加

天知翁

是れまで述べたる所にて簡便法の一通りは盡し畢んぬ、是れより其漏れたる所を追加いたさんとす、

鷄卵の貯へ方。はいろ〳〵あれど通例は箱に籾殻又は枯草などを敷きて卵の尖りし方を上にして埋め、其種卵の如きは鷄の種類と産みたる月日を記し成るべく丁寧に穏かに扱ひ、半月以内に抱卵せしむべし、土、糞など附着せる者は其儘置けば腐り易ければ七八十度の湯にて拭ひ去るべし、種卵は程好き竹筒にて覗き見、其透明あるを用るを要す。



放飼場の事。は兼て述べたる如くあれど、其地廣からざる時は一坪又は二坪位ひにても據なし、其構へは一寸五六分におきて板を割り、之れに圖の如く篠竹を六七分の距離に釘付けにし、之れを杭に取付くるなり。塒木。巾一寸五分程に平に作り悉く縄にて捲き置くを宜しとす、

鷄の病。は療治甚だ難く多く飽食と羽虫と氣候の劇變より來る、羽虫驅除法中硫黄燻蒸法は鷄に由り或は箱より頭を差出すを嫌ふ者あれば、此の如きものには強ひて用るを得ず、丹精なる人は毛拔にて屢々潰し殺すの手段を爲せり、殊に雛は一週間以内には最も注意して、是を除去らざれば成長甚だ悪しくなるべし、鷄は往々咽喉の鳴りて病しき様子を爲す事あり、此時は直に布を細く捲きて其喉に差入れ、拭ひやる事二三回なれば其度毎に粘液附着し來るべし、然る後胡椒粉少しを吹込むべし、此手當を爲さゞれば往々死に至らしむべし、總て酸味を味み又は黴たるもの、腐敗せしもの及び甚辛きもの丶、汚水を與ふる等の事は胃充血、赤痢、加答兒、ピップ、ループの如き病ひを發する原因となるなり、青菜と動物質食物との不足は産卵を休むの恐れあり、宜しく注意すべし。

食料。も既に述たる如しと雖とも、豆類は鷄に適せず小麥は最も利益ありて卵も多く産むべく、最良のものたり、蕎麥も産卵を多くし衰弱の鷄を恢復するの大功あり、オート麥は殻を去れば好んで食し、大麥は此等に次ぐものにて煮て與ふれば好み食ふ、玄米は良好なれど不經濟なり、玉蜀黍は脂肪分多きが故多量に與ふるか又は續けて與ふる時は、肥滿せしめ

胎内に多量の脂肪塊を生ぜしむるを以て、大に産婦を惱む
又は飲食の節を愼み時としては肝臟病を發すべし、故に肉用
類には多く與ふるも可ならざるべく、夏季は冬季より與ふる事少
くすべし、穀類備蓄ビール、糖質澱粉等に何れも煮熟したる瓜
汁な又は汁なに混ぜ團子の如く握り固め與ふ、蔬菜は各種蔬菜
即ち、萵苣、八百、甘藷、南瓜、ハコベ、甘藍、蕪菁等
とす。

跡見花蹊女史を訪ふ

生野ふみ

六月十二日てふ日は予の為に如何に幸に如何に有益なる日にてありけむ曲町の女子日本女性の先覺として既に其芳名を轟かされたる花蹊跡見女史を小石川柳町の居に訪ひて有益なる話を承ることを得たりき故に今其二三を錄して未だ女史の面會に接し玉はざる諸姉の為にこれを告げん但し

女史の小傳は曾て本誌第七十一二號の紙上にあり

且女史の平素に於ける修身工容等の如きは今更申す迄もなく予が贅くせざるも諸姉の既に熟知し玉ふ所なるべければ大體の事に關しては予は敢て餘計の筆を採らざるべし然れども予は女史の為に否後進諸姉の為に特筆大書して之れを告げ然らざればあらぬ事あるなり其は他にあらず即ち女史が幼時に於る家庭の教育并に又女史が當初の志望是なり凡そ世に

異數の人あるは必異數の母に依りて生れ育てられたるものなるは爭ふ可らざるの事實にしてしかも亦免れ難きの道理なり故に予は花蹊女史の名を聞く毎に必其母君の賢常人ならざるべきを豫想せり而して又予は以為らく女史が學窓に身を委ねられたる頃は過に二三十年の前にあることなれば其頃は今日の如く女子教育の說其頭を擡げざりしは勿論學世風な女子に文學は無用なりと斷定なし得たる時代なるに此際にありて早く既に志を立て慨然身を學窓に委ねられたるものは如何に女史の天性之れを好まるゝに基くとはいへ抑又其大名を成さるゝまでに切磋されたるには必他に

志の依て立つ所なくんばあらず

と依て此日一通りの日課を終へたる後先づ第一に女史が母公の人となりと女史が當初の志望如何を問ひたるに女史は為に容を正し色を整へ徐に予に向つて答へらるゝやう

僕の母は實に天性書畫を嗜めり

而して僕の幼き時にも僕の母は常に僕に諭して申さるゝやう凡そ業てふものは何事に依らず其道の粹を極むるには皆夫々に幾多の艱難と忍耐とを要するものなり假令ば今節曲を學ん

で淨瑠璃語りとあらんにも或は三弦彈きとあるにも矢張文人となり學者となるも全一の力を要するあり左れば今同じだけの力を用ひて同じ一つの事を爲すならば其中に就て最も人に尊重せらるべき事を爲すが善しと故に儂は性來好む所にてもあり旁心を潛めて文墨を勵みしあり加之あらず茲に今一ッ尤も儂が奮勵心を皷舞せしものあるあり其は儂の家は素と余程の名ある舊家なりしに或る事情よりして或る者の爲に横領せられ儂等親子は一時非常の辛慘ある境遇に陷りたる事にてありき其頃儂の母は儂を擁して眠らせながらも父に對して語らゝるやう何でも此子を立派なるものとして家名を興させねばならぬなり故に此子は生涯何れへも嫁せしめずして專ら學藝を勉めしむることそ宜しかるべしと儂は子供心にも屢父母の斯く語り續けらるゝを聞き如何にもして

名を擧げ家を興さねばならぬ

と一途に思ひ込み愈倍學藝を勵みて少しも怠る事なかりし也其幸に今日あるを致せしも必竟は此志ありたるが爲のみと。

（未完）

小説

うき世　其五

かほる

牡雞は羽を暖にして其雛を集む、子を思ふの心暖かあれば也荒野の狐穴を深くして其子を慈ふ、子を愛するの情深ければ也況して人の親に於てをや、其心愛は海にも山にもたとへ難かり、燒野の雉子身を焦しても子を救はんとぞ思ふ、世に兄弟の悌あり、朋友の信あり、夫婦の愛あり、されど親子の親愛に如くものなけん、父母ある者は誠に幸福の極みとや云はまし、兩親の内母の愛情は勝れて深きものとぞ聞き侍りき。何れ勝り劣りはあるめれど父の恩愛も淺しとなさず、余の母が身まかり玉ひける後は、余の憂き悩み如何ならんと、母上は今はの際まで口に絶えず、余の身の上を心に懸け玉ひしとぞ、父上もさこそと思されけん、再び余に母上を迎へずと決心し玉ひしとぞ、余が幼き頃終日母を慕ひ、終夜乳を求めて打泣きければ、人々見兼ねて後妻を迎へ玉ふべし、よき人あり杯勸めたりけり、父上は聞ごとに余の事に心づき、雨降る日、風ふく夜、爲す事も手につかず、枕に就くも寢ねやらず、余の爲めに思ひをめぐらし、心を苦しめ玉ひしとなん、苦慮の末遂に心を定め、余が母の遺言もあり、且は余が憂き苦しみ

を受けざるため、殘る年月を此身にて保さばやと思ひ玉ひしと云ふ。

今年花落ちて明年亦顏色を競ひ、今日日沒して亦明日昇く、年々花替はるなし、日移りて止む時なし、されど日々年々人定りなし、移り替はる様、誠に私人の常にぞ似たりける、余の父上は俗事を絶へずと決心し玉ひぬ、されど其心は何時か變り果てぬ、余は父上を歎きし、而も世の人すべて移り心なればなり、余の六歳の春となりぬ、余が學校に通はんに實に止る事ぞ稀なるべし、夜半を過ぐるも何事かあらん、女史は柔和くして學問に富む者と聞きぬ、獨り子なる余を愛し訓しまゐ事やはある、其心は既に喜ばるべければ、ど思ひかへして余に從者を與へ玉ひしとぞ是も余が爲めを思ひ玉ひての故なるべし。

余は見馴れぬ婦人を見て恥かしく亦恐ろしく思ひぬ、父上の膝にすり寄りければ父上は余にいひ玉ひぬ、今日より後の母上にて在はす、手をつきて「母上様今日よりお世話の程願ひまつるとのべよ」と余は之より見馴れぬ人を母上なりとは知りぬ、其面貌長くして目尻り上がりて見えたり、角細ぞやや云ふらん額は角だちたり、鼻高く色淺白くありき、誠に嚴めしき相貌なりければ余は恐ろしく思ひぬ、されど父上に禮をせよと云はれければ余は默然として手をつき頭を垂れ亦恥かしげに父上の傍らに寄りぬ、母上は（是より余は母上と云ふ）余を見てよき稚兒や母がよきもの與へんとて余を呼び玉ぬ、其打笑み玉ふ内にも余は恐ろしかりき、綿の内に針ある如き心地したればなり。

此頃後の事は多く後に聞き覺えし所あり、是より後に記さん事には遂もに余の記憶する所なりかし。

早や浮世に恐の首途ゆ、今鳴る鐘は二時にやあらん、今一筆書きて床に就かん。

母上を迎へて程もなく余は小學校に出でぬ、田舎とて學校の建ちしもあらざりければ教師とてもなく校舎の設けもなかりき、村人議して古寺を借り校舎となし、そが住僧を教師に雇ひけり、余が入校せる頃は前住職みまかり、其弟子なる「學問の稽めにこそ」んなへる習を教へられき、年長けたるは十七八歳にやなりけん、余は七歳にて長たる者と同じ組に編入せられぬ、「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らずと」云へるわかりなりき、一枚程の本文を一日に數へられぬ、教師の傍に次きて衆生同音に讀みぬ、其後一人づゝ讀みねと教師が云ひ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

にき、一人も讀み得るものなかりしが余は滯なく讀み終りぬ、敎師驚きて斯る幼きものすら覺えたり、長たる人々如何に恥かしからずやと云ひけり、余は稚な心にいと嬉しかりき、其頃より何時も余の名は一級の首坐に屬しぬ。

利害相接し、苦樂相混ず、余は學校に行くを樂しみとなせり余には之より面白き事はなかりき、余は家に歸るを好まざりき、家は余の苦界にてありし、ア、人は家々と樂しむ世に家を苦界と思ふとは抑も何の因果ぞ、如何ある不幸ぞ。

母上は余を愛し玉ひしあるべし、余が朋友の家に行くごとに母上は如何にぞやと問はれぬ、余は只默し居たり、或人は云ひぬ、繼母は誠によからぬ者ぞかし、御身の母上は善き人に在はすれば眞身の親と異ならじ、喜び事へよと、余は斯の事を聞き誠によき母上なりと思ひぬ、其後は問はるゝ毎によき母上なりと答へたりき。

始の程は特に深く愛し玉ひけん、余はさ程母上を恐しとも思はざりき、一月二月と過る内半年にもわりぬ、其頃より余は家に止る事を好まずなりぬ、母上は何時も余を愛し玉ひけんも、余が長ずると共に放恣にありし故なるべし、余の罪は誠に深し、母上余を宥し玉へ、かへす〴〵も謝するにあん。

草村に蟋蟀繁く、虫のなく音も淋しく聞えぬ、滿天風涼しく鐘聲遠くひゞきぬ、世を棄てつ世に棄てられつ、心なき身とありはてし、昔の聖人だに、物のあはれを歌ひける時なりけり、うき雲のうき世の空に鳴く雁の、涙や雨と降りけらし、秋としあれば袖を絞らぬはなし、況して僻陬山間の地をや、行きかふ人も絶えはてて、寂寞たらぬ隅もなかりき、日暮るれば行かん方もなく、余は家にのみ止りぬ、或夜父上は何處に行き玉ひけん留守なりき、九時とも覺しき頃母上は余を呼び、とある方へ使に行きねと云ひ玉ひぬ、余は御心に背かんとにはなかりしが餘り恐ろしさに少し躊躇し居たり、母上は殊の外怒り、口を鋭くして余を叱り玉ひぬ、余は泣々家を出でぬ、かすかに見ゆる谷でしの燈、靜かにひゞく谷川の音、遠く聞ゆる犬の聲、何れ淋しさを添へぬはなかりき、余は庭に立て泣き居たり、母上の命には背きがたし、從がはんには恐ろしく、進退谷りぬ、稚心の悲しさ、つらさ、口惜しさ、云はん方なかりき。

やがて余の泣く聲や聞えたりけん、母上は余を呼びぬ、余は使命を果さねば家にも入り得ず、戸口に彳み泣き居たり、下女來りて余を引き入れぬ、余がやくにたゝぬとて母上は強く

叱りぬ、夫れより余は床に入りぬ、間もなく母上も寝ねんとてか床につき玉ひけり、余が啜泣きしけるを聞きて、未だ眠らずや、何が口惜しさに啜泣をするぞ、早く寝ねよと余を近く引寄せぬ、余は堪へ敢、大声挙げて泣出しけり、余は其時の事を書くに忍びず、今も猶ほ余の足に〇〇あり、余は思ひ出すだに悲し、されど、余はよき母上なりと思ひぬ、人の問ひし毎にしか答へたりき、こは余が七歳の秋の事なりけり。

同じ年の冬にかありけん余は一夜行燈の下に書を讀み居たり、余は生来心弱くして人の前に出るをも嫌ひぬ、母上の前にて音たてゝ書を讀まん事も怯れぬ母上は余に音たてゝ讀みねと云ひぬ、余が従はざりければ母上は遂に云はざりき、とかうする内に父上歸り玉ひぬ、母上は余が従順ならぬよしを父上に語りぬ、父上は忽ち怒りて余を叱り剰さへ余を打ちぬ、親として子を愛せぬ者やはある、父上は深く余を愛し玉ひしならん、されど母上の手前あるを如何はせん、余を打ち玉ふは必らず本意にてはなかりしならん、天にも地にも一人の子、掌中の玉とも愛づべきに、嗚呼まゝならぬは浮世の常とか、愛子を打つ心の中如何苦しかりけん、余はちらと見とめぬ、恩愛の涙両眼より滴りしを、余未だ母上を恨みし事なし、何時もよき母上と思ひ居たり、母上はと問はるゝ毎にしか答へぬ、

余は何頃みて書かまくほしけれど今は此に筆を擱かん、露の命何消え残らば明日にも書きつぐべし、今日は少し病も甚りぬと医師は云ひぬ。ヨレ少しは癒ゆるとも所詮長らふべき身ならじ。

寄書

思ひ得たることども

白桐生

、此頃市中にて折々わかき女子の頭にはんからーふをまとひたるを見ることあり是は當人はよきつもりかは知らねどよそ目には隨分見ぐるしきものなれば別に隨などのなき限は取りのけてもらいたし

、説教などかけたるに於ては邪魔らしきものなりさる説をなすもいもありさ如何にしても婦人のかけたるは品あしき様に思ひ其習慣のみは致方なけれど邪魔なるものにやめてもらいたしまた申すまでもなけれど致方なきも可成は目立たぬを用ゆるがよろしからん

〇束髪は取りわけ昼より夏期はすが〳〵してよろしけれどあまり新奇なるをひてさま〳〵にむすびかへ頭をおもちやにするは頭に對して餘り無禮なり中にはあまりに奇にして滑稽のきたるもある様なればいらぬことながら一言申しおく

〇とかくのおめうりは誠に野鄙なる所なぞ論ひて市中を横行するものなれば甚風俗に害あり余は常に習慣にて之を禁ぜられんことを希ひ居れりしかるに先進

來余は子守が此歌をきゝ覺えてお守をしながら村に達に傳授し居たるを二三度も見受けたり是は甚宜しからぬことなりと思ふ何卒御子達のある家樣は此傳授をなさぬやう子守をきびしく誡められたきものなり

○貴社雜誌の開卷は甚よきお思ひ付きにて讀者諸君には無此上便利なる方法なるべし然るに中にはあまりにつまらぬことを尋ねらるゝ方もある樣なり小說家の年齢を記憶し居たればとてさのみに文學の參考になることもあるまじ少しく問を撰ばれては如何

○此頃は演劇も追々進歩して最早さまで見ぐるしき事も無くなりたる譯なれば貴社雜誌にも例の御精妙なる筆にて御批評を御掲載ありては如何さすれば御婦人方には至極便利ならんと思ふなり

○三十一文字亦何をか言ひ得んやなどゝむごく評する人もあれど決して然らず短歌は短歌だけに寸鐵殺人の妙所ありことに御婦人方を優美にするは短歌など尤効あるやう覺ゆれば皆々方の奮發して御學びあらんことを願ふ

○近頃武術を學ぶこと大に流行になりて御婦人にも薙刀をふるひ鎖鎌を弄せらるゝ方隨分あるときく是体育上にも護身上にも甚よき事なりしかし余は御婦人方の修めらるゝ武術は是等のものよりは柔術を尤適當なりと思ふ誰しも知るごとく柔術は名に現したる通り武術の中にてはあまり手あらきものにあらず且身体を動かすこと四肢不同あることなし其上徒手にて敵を防ぎ得るが故に急に事あるに當りて甚用にあふべし只今の時世にては刀劍薙刀等は皆常に手近にあるものにあらねば不意に暴行に遇ふも防ぐに苦しむべけれど柔術なれば其きづかひ無しと思ふ、故に御婦人方の學ばるゝ武術は是が一番よろしからん

尙是より後も折々存じよりは申上ぐべし皆々理屈にかなひたることにもあるまじけれど御採錄あらば有難く存し可申候

ほとゝぎす

唖の舍 谷濤子

(一)。伏屋の 竹垣 露 深み。 一輪の 月 影 淋し。
無念? 亡せにし 我が君の。 あかぬ情に、 袖 濡らす。

(二)。姿は 止めで、 泣きし 音に。 すゝ あな可憐し、 八千八聲。
血を 吐く迄に、 いわつゝも。 悩みし 心で、 誰や 知る?。

閑書

偶感

泡月女史

煙霞渺漫として紅紫色を競ひ、鶯囀杵喚の聲を夜て徐に和風を送るの候既に去て、今や時これ初夏綠樹の翠竹色漸く新たに、杜鵑樹に啼て意外薫風至る、嗚呼我等浮世奔流のうちに在り三省顧慮周り總て學術の進步せざるに愕然として歎ぜざるを得ざるなり、妹等去る臘部を離れ故山の涼味を念にし期に依て作つの瞳說に接し、致何邸の如くに經過し去て再び學窓に戻宿の皆が宿め、得学ふじて窓に入るゝの時今父許に於ける湖光山色を見るの期あらんとす妹が歡迎する諸姉泡月氏に妹等を埃たず、今夏第に歸るの日皆川は終ふて妹等を訓ふべきか、暑假中で妹等を慰め得るか、妹等また何等の顏を以て父母に謁するを得べき、深く思ふてますく阿從の怠惰遊逸を悔ゆ、嗚呼年少の女子は永識に存むるに斯すて記憶存せ長く約模をなせんや、深く過去の非を悔て遠く未來の時を自なすべきのみ

破月子曰、君が云ふ所よし請ふ君一日改過知したることを再び為改す…の日あらしむ勿れ、我等の後悲愛なる父母の膝下にあるの日浮ある殘念に涕淚を存するあるべからず余は父母に於て誓約せらるゝの書謝に望むふるへし

交詞

みに子

●在根岸濱田女史に申す　御尊君の如き且つ御きれ事ふ所は今存じませんが若し御望みならば御主人のふに成る女學校に御問ひ合せになるのが宜しいでしよふ、日本人の手に成る私立學校では左樣の事は余程むつかしい事と思ひます、而も貴君の御性質、品行、學力等をよく知れば或は出來るかも知れませんが叉できないかも知れません、先に角一葉の御端書だけでは何とも御答はできません

●若代郡山葉女樣と熊本縣八代郡高田村郡潔子樣御兩人に一所に御答へ申すことに致しますが丁度同じ御問ひでしたから、借假名づかいを教ふる書も色々ありますが最も宜しいのは古言梯（一冊）といふ書ですこれは群書類從（之にナヒコと讀むのです）の著だと申します、本居宣長の言葉のやちまた（二十冊）も宜しいでしよふ、和書を賣る所にて御求めなさい弊社から御取次も致しましよふ

●本郷にて南娥樣　本号の撰者子と申すのは高等中學校の者では御座いません、本名は此所に現はす譯に參りません

時事

經濟家の議論如何

貨幣は數を計出するものなり、人心を計出すること能はざるものなり、夫れ然ども其害が甚しみを受けたるものゝ身に取りて如何あるべきやの事は、教育者の論に研究すべき處ろにして經濟學者の知る所ろにあらず、種々を何如に使用すべきやの問題に於ても經濟學者の口を容るゝこと能はず、一個人が私有の金を無益に用ゆると、及び政府が人民に對けるの財政に在りては、經濟學者の知り得る所ろに非ざる也。

今年目の損失

昨年頃は万事ちわくとして心の落付かざるものなり、心の落付かざるときは何の落付かずして何事も出來ざるものなり、總べての下凡官吏はなく、今にも免職にならんかと、文官も心配すらく今にも移されんかと、大臣すら高廣寸相も位か如何なからんかと、堂々たる官吏が此にして既に然り、今の府縣會議員も近くに改まらんとし、議會議員は之より定まらんとし、學校教員は位置法律にならんかと擔念す、あゝ今年は殖産事業上何如斗り大損亡あるの年ぞや。

美人獨坐

山陽の詩に、

照倚銀屏釵影横、　酒醒燈冷此時情、　芳心一點向誰結、
付與隣樓暮雨聲、

是れ豈に閨秀の美人のみならんや。

こがひ

蠶を養ふは兒から兒を養ふが如し、故にコガヒと云ふ、斤々の手間を費みて之を試む、僅かに數十枚に過ずと云へども、人の気附かざるなる也。女子國立學校及び明治女學校等の女生中まゝ之を其宇内に於て養ひたるものあり、彼等が言ふ所を聞けば、其樂みは日に千金の價ゆるに勝ると云ふ、蓋し清泉堤中より湧出るが如く、白薇大土より生るが如く、蠶は日夜に繁榮するが如く、快味言ふるに堪なき妙の夫れ蠶業は日本婦人の最大の業なり、此業を經するとは大なるが上に、尚ほ人に勸へ之の樂みを與ふ、大に齎に獎勵ある所。

信なきに在りと

識人云く、邦人今日の欠點は、崇敬の念なくして長上を敬はざるにありと。實に然り、然れども只だ之を責むるも殆んど効なし、此點千万の短所は皆日本人頭傳の浮薄心に發し、而して其浮薄を重くするの「信仰心」なきを目下の殊に憂ふべき

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ものとす、吾人常に歎ず、邦人近世の大欠點は「信」なきにありと。

夏の日の詩人

東京果して詩人の住處にあらざる乎、見よ幾多の腐敗極弊は詩人の愛國心を動かすにあらずや、詩人をして只だ蛙の鳴く音に聞とれ、ほたるの飛ぶに見とるゝものならしめば、彼には田舍こそ好けん、左れど斯る詩人は吾黨の所望するものにあらざる也。然りと云へども、田舍には今日撰擧の競爭雜々たり、彼の詩人此に入らば嘔吐卒倒すべきか、然らば則はち目下迚も其好住處はあらざる也。

各宗管長會議

各宗僧侶にして政黨に加入する事を許さゝる旨を議決したる由、極めて喜こぶべきの事なり、今の僧侶が政黨に關係するは害ありて益なかるべし。

産みの苦しみ

世、母が兒を産むとの在程に難澁ある筈なし、其の難澁あるは必らずや自然に逆らふ所あるがゆえあらんと思ひたりき。本號に掲げたる中濱學士の説大率ね之に同じ。蓋し取擧げの仕方と産の仕樣との惡しきに由りて意外に苦しむなるなるべし、諺に云く、案ずるより産むが安しと、産みの苦しみなるものは必らずしも必至自然の運にあらざるべし、然るに實際に於て其多く然らざるは、主として産婆の人を得ざるに因る、産婆養成所の設立せらるゝは、大ひに賀すべきと也。

樂い哉

朝早く杜鵑の聲を聽く、夜深く螢の飛ぶを見る、夏來れば涼風あり、熱高ければ氷を得、時ならず炎々たるの日、樹下に臥すれば清快の草なきにあらず、人間靜かに思ふときは到る處ろに安樂あり。

農科大學

駒場農學校は帝國大學の一つとなれり、之れ尤もなる改良にして幾分か入費を省くの助けとなるべし。左れど之を高等中學の上に置き、大學の一部と為すときに於ては、從前の農學校課目を一層高尚にし、獸醫科を醫學部に附屬し、山林科を農政學中に納め、單に農藝化學及び農政學を教ゆるものとのみ為すべし、斯の如くすれば、一層入用を減ずべし。左れど若し斯の如くすればわざ〳〵駒場に離ち置くの必要もあるまじ、之を加賀屋敷内に合併すれば入費いよ〳〵減ずべし、國の為に祝する所ろ也。

女學生艶聞發生の時季

世間の忙がしき時には新聞屋も空口を開かぬもの也、今日撰擧熱の烈しき時節には、「女學生艶聞」などを製造するの暇まなし、然れども七月一日撰擧了り、十一月帝國議會の開ける迄、總じて世上寂として新聞種の稀少なき時には、常に大ひに注意すべし、と、是れ或人が各女學校幹事に忠告したる所ろのものなり。

救濟記事

●婦人矯風會救濟部

目下救濟の事に同會員が熱心に盡力する所ろにして、前同すでに一度演說會を開き、去十五日は一番町青年會會員と計りて音樂會を催ふしたるが、近日再たび同様の會を催ふす由、而して同會員は日々奔走して實際補貧の人を尋ね廻り居るに、危急旦夕に迫るもの府下にて凡そ二百六十戸あり、此頃其救濟に盡力中なり。

●救濟金本社取次

本社は救濟金寄贈者の便を計り、何の處にも屆け參らすべし、但し何處にと定めて御申越ある時は、悉とく皆婦人矯風會救濟部へ轉送すべし、尚ほ同會の働らきの報告は細密に誌上に記載すべし。　則はち本日(十六日)迄に取次ぐもの如左、

金十七圓四十五錢　明治女學校寄宿生食料の中より。
金三圓廿八錢五厘　明治女學校生徒有志中
金三圓　中嶋さと子
金一圓　靜岡英和女學校無名女子

廢娼記事

●丹波國通信

我が丹波の國は福知山(天田郡)と申す所に賣淫公許相成居候得共其他に公許は無之况も福知山の如きも餘り澤山は無之由傳聞致居候當時我が教會の傳道牧師諸氏傳道中にて來道者七八十名も有之候由に付き行く〳〵は立派なる廢娼論者の出來候事と相待ち申候、曾つて我が船井郡園部にも賣淫公許出願致居已でに許可ならんとせし由なりしが當地の前田英吉氏(我が教會員先きの府會議員)の盡力にて有志者を募り許可相成らざる樣請願せられたるを以て遂ひに不認可と相成候次第に候

(前田貫一郎)

●賦金

去月中府下の各貸座敷引手茶屋の賦金は(吉原)貸座敷千九百四圓十八錢八厘、引手茶屋百三十圓一錢八厘(洲崎)貸座敷八百六十圓四厘、引手茶屋三十三圓九十三錢九厘(品川)貸座敷四百六十二圓三十五錢三厘、引手茶屋十八圓三十四錢八厘、(新宿)貸座敷二百九十八圓五十八錢、引手茶屋四圓三十八錢三厘(千住)貸座敷百六圓廿五錢(板橋)未詳なりと、

女報

○感化院へ下賜金　本郷なる東京感化院は設立以來不良の少年を感化すると少からざる趣を聞召され思召を以て今二十三年より向五年間年々金二百圓下賜の旨去る十一日同院長を召喚して宮内省より御沙汰ありしと云ふ。

○皇女御種痘　目下皇太子殿下には再度の御種痘を遊させらるゝに付き去る十一日大日本私立衛生會より最良の牛痘を御取寄に相成たる由なるが此際常宮、周宮兩皇女にも御種痘遊さるゝ由に承る。

●スピンチル氏　は來る廿九日午後三時牛込岐坂教會に於て「婦人が慈善事業に於ける心得」を講演せらるゝ由。

●女子の牧師　フランシスタウンスレー女史はネビア府の洗禮教會に牧師となり五月一日より其任に就きし由、

●スコットの小說の註解者　アイチア洲のメーイローウヲル嬢はスコット小說ウエーヴァリー(其内に千三百餘の人物ある小說なり)の字引を著はせりと、是に依て讀めばスコットの小說甚た解し易しとなん

週報

○官令　十一日勅令第九十一號にて法制局官制同九十二號にて東京農林學校を帝國大學の分科となすの件同九十三號にて帝國大學官制中改正の件を裁可公布せらる。十二日勅令第九十四號にて陸軍將校馬匹制改正の件を裁可公布せらる。●十三日勅令第九十五號にて參謀本部條例中改正の件同九十六號にて陸軍豪馬飼養條例改正の件同九十七號にて兌換銀行券減の件等を公布せらる●十六日法律第四十二號を以て明治十年第五號布告廢止の件を裁可公布せらる

○宮廷　十三日土耳其國特派公使ヲアンエドミラル、オスマン、パシヤー以下六名へ拜謁食仰付けらる。

○政治　十日內閣會議に山縣、山田、松方、大山、後藤、樺山の六大臣は集會したり●同日各府縣多額納稅者貴族院議員當選結了せり●同十三日山縣、山田、松方、大山、後藤、青木、樺山、芳川の八大臣登閣せり●十五日山縣、大山、山田、後藤、土方、芳川の六大臣鎌倉なる伊國公使マルチノー氏の禮莚に赴けり。

○外交　九日青木外務大臣は夜會を開きて各大臣各國公使を招聘したり●十三日田中佛國公使歸朝。

○教育　十六日芝公園彌生社に於て獨逸協會學校卒業證書授與式あり。

○新誌　十日日本新聞解停。

○雜報　十五日下谷新町觀通寺に於て彰義隊及各地に於て戰死したる舊幕臣の大法會あり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

本校の學期は豫科三箇年本科四箇年にして別に二箇年に渉る高等科の設あり入學生は寄宿生百三十五名通學生百名を限とす毎科受持の敎員孰れも熟達善良なり然して本校の敎授は實に完全なりとの世評を獲んとは本校の希圖する所なり規則書等御入用の御方は校長宛に御照會を乞ふ

麻布區鳥居坂十四番地　**東洋英和女學校**

廣告

第二回夏期學校廣告

昨年北米マッサチユセット洲ノースフヒールドニ於テ開カレタルムーデー氏ノ夏期學校ニ臨マレ近頃歸朝セラレタル

押川方義君 ハ委員ノ請ニ應シ校長トナラレ

醫學士高田耕安君 ハ開校中出張ヲ承諾サレタリ又

入校ヲ申込マレタル諸君ハ成ルヘク開校當日迄ニ來校セラレヨ寄宿舍ハ三日ヨリ開キテ諸君ノ來宿ヲ待ツヘシ汽車ヨリ來校ノ諸君ハ品川停車場ニテ下車セラル、方便ナリ同塲ヨリ學校迄ノ途ハ容易ニ知レ得ル樣工夫ヲナシ置クベシ

日本郵船會社及日本、兩毛、水戸、甲武四鐵道會社ノ割引乘車證入用ノ諸君ハ六月卅日迄ニ住所姓名及學校敎會名又ハ職業ヲ詳記シ校費金廿錢郵税金二錢ヲ東京市本郷郵便局拂渡シ本郷東片町金華樓内村上直次郎宛ノ爲替ニテ同人ヘ送ラレヨ直ニ生徒證ヲ添ヘ送ルヘシ

入校申込ノ期日ニ後レテ來校ノ決意ヲナサレタル諸君ハ直ニ東京市芝區白金明治學院内多田素宛ニテ其旨ヲ報セラレヨ委員ハ及ブ丈ハ諸君ノ爲ニモ周旋ヲナスヘシ

第二回夏期學校委員

社告

問題

第二回懸賞和歌募集廣告

我社先きに第一回懸賞和歌を募集し大に世人の注意を惹きぬ世上幾多の淑女諸君が秀詠を寄せられし事は誠に我社の榮のみならず、女學の爲め賀すべき所とす、今更に第二回懸賞歌題を掲げ、愈女界に和歌の隆盛ならん事を計る、願くは世の淑女諸君續々御秀詠を寄せられん事を

○歌題　夏山家　水邊晩涼

○七月二十五日〆切○第一等賞女學生半年分○第二等賞婚姻論一冊○第三等賞猫と鼠一冊○一題につき一人一首に限る　○撰者池袋情風大人

女學生

毎月一回廿日發兌　一冊郵税共六錢

京濱間の十五女學校聯合して一雜誌を發行する事となりぬ、之を「女學生」と云ふ、尙聯合に加はらんとする者は續々申込みあるべし

文學會は一校の生氣ともなるべきものなり而して何れの學校にても文學會の盛なるとなし「女學生」は各女學校文學會の中心となり記錄となり廣告となり且獎勵者たらんと欲す

欄　欄を分つて七となし○社說には學藝上の論說を掲げ○文欄には各女學校文學會より寄贈せる和漢洋文章、詩歌、繪畫等を掲げ○寄書欄には世の女學生より寄草せるものを載す○評林には本誌に對する世評を載す○女生交詢には女學生相互の質問答辨を掲ぐ○報告の部には各女學會及其他女學に關する事柄を報道すべし○別に講武の欄を儲て女界の武道を說く。

女學の隆盛を望む者は宜しく一讀あるべし「女學生」は女子の文花咲き亂れ千紅美を爭ひ萬紫妍を競はす所なればなり女學の隆盛を計る實に「女學生」の目的なり。

發行所　**女學雜誌社**

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

守田家製御匂ひ袋各種

御懐中持 君ケ袖 小包 價十五錢
大包 價三十錢

御簞笥用
桐壺 一掛 價一圓
八重櫻 一掛 價五十錢
柴舟 一掛 價二十錢

右は孰れも拙店自製の品にして近年行なはるゝ專ら外飾のみを勤めたる粗製の品とは隔段の相違に御座候宜しく御用ひ比べ可被下候

○但し香氣劑に付請賣差出不申候

正眞新鮮 麝香

麝香は正眞新鮮上等のものを鬻ぐ事甚難しこれ其數多きを得がたければなり拙家幸ひに賣丹調製の爲めに麝臍を使用事一年間凡そ三千餘球に至る故に自ら新鮮上等を發賣するを得るなり御求の諸君通常の麝香と其優劣如何の比較を賜はらんことを冀ひ候なり

賣丹本舗
東京池之端仲町二十七番地
守田治兵衛

少年園

第四拾號目次 六月十八日發兌

勝海舟翁の眞蹟(石版摺)
將軍ウルフの戰死(卷首の插畫)

少年園
流行以上に解脫す　華族女學校長、西村茂樹
德義會に於ての演說

學園
高山登蹟の壯觀及び利益(圖插)　理學士、三好學
地球の年齡　能勢榮

文園
愛國五傑小傳(插畫)　文學士、坪内雄藏

譚園
童男童女東西叢談
將軍ウルフの戰死　工學士、大竹多氣

叢園
近世史の一材料○海舟翁壯時の根氣(肖像入)○少年坐右の談○新富座と歌舞伎座(插畫)○紳士三人○金錢○嗚呼窮矣○感情論○新刊略評

芳園
寄送の邦文

每月三日、十八日發兌○一冊定價金五錢○十二冊(半年)金五十五錢○廿四冊(一年)金一圓○郵稅一冊金五厘○爲換拂渡局本鄕郵便局

發行所 東京府下北豐島郡上駒込村山縣邸内 少年園

明治二十三年六月二十日印刷
明治二十三年六月廿一日出版

發行所 東京麴町區富士見町二丁目一番地 女學雜誌社

編輯兼發行人 東京麴町區富士見町二丁目一番地寄留 巖本善治

印刷人 東京神田區三崎町壹丁目十三番地寄留 森田豐

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

守田家製御匂ひ袋各種

御懷中持　君ヶ袖
御簞笥用　桐壺　八重櫻　柴舟

小包　價十五錢
大包　價三十錢
一掛　價一圓
一掛　價五十錢
一掛　價二十錢

右は孰れも拙店自製の品にして近年行なはるゝ專ら外飾のみを勤めたる粗製の品とは隔段の相違に御座候宜しく御用ひ比べ可被下候

〇但し香氣劑に付請賣差出不申候

正眞新鮮　麝香

麝香は正眞新鮮上等のものを鬻ぐ事甚難しこれ其數多きを得がたければなり拙家幸ひに寶丹調製の爲めに麝臍を使用事一年間凡そ三千餘球に至る故に自ら新鮮上等を發賣するを得るなり恩求の諸君通常の麝香と其優劣如何の比較を賜はらんことを冀ひ候なり

寶丹本舖
東京池之端仲町二十七番地
守田治兵衛

少年園

第四拾號目次　六月十八日發兌

勝海舟翁の眞蹟（石版摺）
將軍ウルフの戰死（卷首の插畫）
少年園
流行以上に解脱す　華族女學校長、西村茂樹
德義會に於ての演説
學園
高山登躋の壯觀及び利益（圖插）　理學士、三好學
地球の年齡　ニチエロル、ハナフサイエンス、能勢榮
文園
愛國五傑小傳（插畫）　文學士、坪内雄藏
譚園
童男童女東西叢談　工學士、大竹多氣
將軍ウルフの戰死
叢園
近世史の一材料〇海舟翁壯時の根氣（肖像入）〇少年坐右の箴〇新富座と歌舞伎座（插畫）〇紳士三人〇金錢〇嗚呼窮矣〇感情論〇新刊褒評
芳園
寄送の邦文

毎月三日、十八日發兌〇一冊定價金五錢〇十二冊（半年）金五十五錢〇廿四冊（一年）金一圓〇郵税一冊金五厘〇爲換拂渡局本郷郵便局

發行所　東京府下北豐島郡上駒込村山縣邸内　少年園

明治二十三年六月二十日印刷
明治二十三年六月廿一日出版

發行所　東京麹町區富士見町二丁目一番地　女學雜誌社

編輯兼發行人　東京麹町區富士見町二丁目一番地寄留　巖本善治

印刷人　東京神田區三崎町壹丁目十三番地寄留　森田豐

遞信省認可